

防衛機制理論を TAT 解釈に適用する視点の検討

Applying Defense Mechanism Theory to the Interpretation of the TAT

土 屋 マ チ
Machi TSUCHIYA

Abstract

This study aims to examine the following two points by focusing on the defense mechanisms manifested in the Thematic Apperception Test (TAT). (1) to provide an overview of defense mechanism theory developed by Sigmund Freud and Anna Freud, and (2) to position defense mechanisms as an interpretive perspective in TAT analysis and to organize them theoretically.

First, the study reviews Sigmund Freud's concept of defense as the starting point of defense theory and discusses Anna Freud's systematic formulation of defense mechanisms, focusing on her perspective on ego functioning and adaptation. Next, drawing on the theories of Anna Freud and Reiko Baba, eight defense mechanisms considered clinically meaningful in TAT interpretation are identified and organized: ① regression, ② reaction formation, ③ isolation, ④ undoing, ⑤ projection, ⑥ denial, ⑦ identification, and ⑧ sublimation. The study further examines the potential ways in which these defense mechanisms may manifest within TAT narratives.

By clarifying an interpretive perspective for identifying defense mechanisms in TAT stories, this study provides a foundational theoretical basis for future empirical investigations of defense mechanisms in TAT interpretation.

1. 問題と目的

1. 防衛機制の概念

馬場 (2002) は精神分析事典の中で、防衛を「耐え難い不安、不快、苦痛、罪悪感、恥などの体験をひきおこすような情動や欲動を、意識から追い払い、無意識化してしまう自我の作用の総体をさす。その目的は、精神内界の主観的意識的安定を保つことであり、そうした自我の意識的、無意識的な働きを防衛と呼ぶ」(p. 441) と定義している。この定義にあるように、防衛機制とは、個人が不安や葛藤、欲求不満に直面した際に心的な均衡を

維持し、自分で自身の心を守る働きである。それは、自我が無意識的に用いる心理的メカニズムとして仮定され、理解されてきた概念であり、精神分析理論の中核を成している。

防衛機制の理論的出発点は、Freud, S. が精神病理学を研究していたことに始まり、後に Freud, A. は、抑圧、否認、投影、合理化など、日常的にも観察されうる多様な防衛の様式を整理・理論化した。Freud, A. は防衛機制を単なる病理的現象としてではなく、自我の発達や適応と密接に関連する働きとして捉え、防衛機制理論を体系化・精緻化した。

一方で、これらの理論とは異なる次元から防衛を捉え直したのが、対象関係論の立場に立つ Klein, M. である。Klein, M. が提示した「原始的防衛機制 (primitive defenses)」とは、主として人生早期、特に乳幼児期において用いられる防衛様式を指す。Klein, M. は、心的世界の最初期には自我は未分化で脆弱であり、外界と内界、自己と対象の区別も十分に成立していないと考えた。そのような段階において、自我は強烈な不安—とりわけ破壊的不安や消滅不安といった死の本能から自己を守るため、極めて原始的な防衛を用いると考えた。代表的な原始的防衛機制としては、分裂、投影同一視、否認などが挙げられる。原始的防衛は、通常は発達の進行とともにより成熟した防衛へと統合されていくが、強い不安状況や人格構造の特性によっては、成人期においても再活性化されると考えられている。

このように防衛機制は一つに完成した理論ではなく、① Freud, S. による病理形成に繋がる防衛概念、② Freud, A. による自我の適応・発達としての防衛機制論、③ Klein, M. による人生早期に由来する原始的防衛理論、という複数の理論的体系を含む多層的概念であり、防衛機制の種類は多岐に渡っている。

2. 投映法における防衛機制の理解

心理臨床において、防衛機制を理解することは、クライアントの病理やその適応のパターンや外界との関係性などを理解する上で重要である。防衛機制は主として、無意識的に機能する心的過程であると仮定されており、そのような特性を踏まえると、刺激への自由な意味づけを通して、被検査者の内的世界や力動的過程を把握できる投映法は、防衛機制を理解する上で重要な意義を有すると考えられる。

一般的に投映法の代表格と言えば、ロールシャッハ法と TAT であり、これらの投映法検査を通して防衛機制を捉えるアプローチについて検討されている。ロールシャッハ法の防衛機制研究は、精神力動論的枠組みと評価尺度の両輪で進められてきた。代表的指標として Lerner, P. M. (1990, 1996) の Lerner Defense Scale や Cooper et al. (1998) の Rorschach Defense Scales、近年の Rorschach Omnipotence Scale (ROS) (Homann, E., 2018) がある。我が国では小此木・馬場 (1972) が、Schafer, R. (1954, 1967) の主題分析の追試を通して、防衛機制の独自の分類方法を整理している。各防衛機制のロールシャッハ法上のあらわれについても具体的な例示を通して、その特徴を明らかにしており、その成果は『精神力動論』としてまとめられている。このように、ロールシャッハ法では防衛機制を捉えるために比較的明確なモデルが整理されている。

一方、TAT (主題統覚検査) は、図版を見て物語を作る心理アセスメントの技法である。物語に反映された沈黙や戸惑い、言葉を通して被検査者の対人関係様式、葛藤、欲求、感

情などの心のあり様を読み取ることが、分析・解釈の基本であり、創始者 Murray, H.A. は無意識を引き出すことを目指した。TAT における物語は、被検査者が刺激図版に意味づけをする過程そのものであり、そこには語りの内容のみならず、感情の扱い方、現実の歪曲の仕方、葛藤からの距離の取り方といった語りの構造そのものが、無意識的な心のあり様を反映するとの前提に立っている。

TAT 上にあらわれる防衛機制について、Cramer, P. (1991) は、Defense Mechanism Manual (以下 DMM) を提示し、TAT 物語に表れる否認、投影、同一視の防衛機制を 7 段階の評価で体系的に抽出する方法を提案している。DMM に代表される Cramer, P. (1987, 1991, 2007, 2015) の防衛機制研究では、取り上げている防衛機制が限定的である。また、発達の変化などとの関連において防衛機制について検討しており、TAT における防衛機制の多様性を十分に位置づけるまでには至っていない。

3. 本研究の目的

TAT は、対人関係場面が描かれた図版を見てお話を作る検査である。曖昧なインクの刺激であるロールシャッハ法に比して、被検査者の防衛は、その語りにおいて表現されやすいと考えられる。TAT ストーリーに表現される一つひとつの言葉をより深く読み解く力は、クライアントによって語られる言葉を扱う心の治療のスキル向上にも寄与すると考えられる。さらに、精神分析理論に基づいて精神病理を理解しようとする際には、病態水準によって使われる防衛機制が異なるため、TAT プロトコルから、防衛機制が読み取れるようになれば、精神病水準の病態水準においてよく使われるとされる防衛機制、神経症水準の病態において用いられる防衛機制という捉え方が可能になる。さらに、被検査者の自我機能や心理的適応の様式を把握する視点を明確化する上でも意義があると考えられる。

本研究を出発点とし、今後の最終目標は、現段階において十分に整理されていない TAT 上の防衛機制を捉えていくための枠組みを明確化することである。本研究では、多岐に渡る防衛機制理論において、以下 2 点を目的とする。

- ① Freud, S. および Freud, A. の防衛機制理論を概括する。
- ②心理臨床上、TAT で防衛機制を読み取ることが特に意味を持つと考えられる防衛機制について、防衛機制を体系化した Freud, A. および防衛機制を具体的かつ詳細に論じている馬場 (2008) の防衛機制論をもとに整理を行う。その上で、その理論をもとに TAT 上での防衛機制の現れ方の可能性を記述する。

II. 防衛機制の出発点—Freud, S. の防衛理論

Freud, S. は 1893 年の『ヒステリー現象の心的機制』において、ヒステリー症状を器質的障害の結果としてではなく、恐怖、不安、恥辱、苦痛といったネガティブな情動を喚起させられる心的外傷体験や観念が、適切な形で言語化・意識化されないまま処理され、身体症状へと置き換えられた結果生じた現象として説明しようとした。この論文の中で「機

制 (1893/1974)」(p. 18) という用語を使った。症状形成の背後に一定の「心的機制」が存在することを仮定しており、ここにすでに後の防衛機制理論の原型を見出すことができる。すなわち、耐えがたい情動や観念が意識の連合から切り離され、別の形で表現されるという考え方は、のちに「防衛」や「抑圧」として理論化される概念を先取りするものであり、防衛概念の理論的起点として位置づけることも可能である。

翌 1894 年、Freud, S. は「防衛 (Abwehr)」という概念を明確に用い、『防衛—神経精神病』を発表した。この論文において Freud, S. は、ヒステリー症に加えて、恐怖症、強迫神経症といった神経症について、受け入れがたい、とりわけ性的・攻撃的な意味を持つ観念が、それに伴う感情から分離され、他の折合いのつく表象へと誤って結びつけられる無意識な防衛であると説明している。つまり、ここでの防衛とは、耐えがたい観念そのものを消去する操作ではなく、観念と感情との結びつきを変えることによって、自我にとっての不安を回避しようとする心的な操作として理解されている。さらに Freud, S. は、自我にとって耐えがたい表象や観念をその情動とともに徹底的に投げ捨て、幻覚的な夢想世界へと逃避した場合には、防衛の結果として「幻覚的錯乱状態」が生じうる症例が存在することを示している。ここでは、防衛が症状形成にとどまらず、精神病的状态へと至る可能性を示唆しており、防衛概念が神経症だけではなく、精神病へと拡がる例がすでに示されているところが注目される。

Freud, S. は、ヒステリー症状や強迫症状などの神経症を耐えがたい表象や観念から自我を守ろうとした心的操作の結果として理解しようとしていることから、すでに防衛を症状形成の中核概念として位置づけていることが理解できる。防衛は心的葛藤を表面的には解消する操作である一方で、その葛藤を症状という歪曲された形で存続させるものであり、防衛が成功しているがゆえに、症状が形成されるという状況が提示されている。しかしながら、1894 年時点における防衛概念は、防衛がどのような心的法則に基づいて発動するのかといったプロセスについては、まだ十分に理論化されていない。

1915 年の『抑圧』において、Freud, S. は防衛機制の中核である抑圧を詳細に理論化している。Freud, S. (1915/1970) は、「抑圧はもともと存在する防衛機制ではなく、意識された精神生活とのはっきりした区別ができる以前にはありえないということ、抑圧の本質は意識からの拒絶と隔離においてのみ成り立つ」(p. 79) と述べ、抑圧を防衛の一類型ではなく、他の防衛機制を成立させる基盤として位置づけている。また、抑圧に付随する形で各神経症における抑圧機制的あり方について、ヒステリーと置き換え、強迫神経症と反動形成を結びつけて論じている。

Freud, S. の防衛理論をまとめる上で決定的なのが、1926 年の『制止・症状・不安』である。この論文において Freud, S. は次のように述べ、「防衛」の概念を復活させている。「私は一つの概念—もっと遠慮するという一つの術語—をふたたび採用した。この概念は、三十年前に私の研究の初めにもっぱら使用したが、その後はすてておいたものである。私は防衛過程のことをいっているのである。そのうちに私はこの防衛過程という概念のかわりに、抑圧という概念をおきかえたが、この両者の関係ははっきりしない。現在私はこの防衛という古い概念をまた使用しなおすが、たしかに利益をもたらすと考える。それ

には、この概念が、自我が葛藤にさいして—それはときには神経症をまねく—役立てるすべての技術を総称していることを忘れてはならない。抑圧はこの防衛手段にあるもの、つまり、われわれの研究方向の関係から最初に分かった防衛手段の名称なのである (Freud, S., 1926/1970)」(p. 370)。

小此木 (1970) は、Freud, S. は「“抑圧”をすてて『防衛—神経精神病』以来の“防衛”の概念を徹底させ、不安にたいする自我の防衛機制からヒステリー (抑圧)、強迫神経症 (反動形成、分離、取消し) の精神分析学的なちがいを理解する、現代精神分析の神経症学がここにその基礎づけを得ることになった。つまり不安は、その理論の中心の位置を占めることになった」(p. 453) と述べている。防衛は「抑圧」のみに還元されず、抑圧に付随する形で多様な防衛のあり方が症状形成とともに論じられている。これらは「性格の癖」ではなく、不安や罪責感などの耐えがたい情動を回避し、本能欲動 (エス) と現実や超自我要求の折り合いをつける試みとして理解されている。いずれも後年の Freud, S. によって「防衛機制」として体系化されるが、Freud, S. 自身の議論では、あくまで葛藤の力動的処理として症状形成につながる精神病理の理解として扱われていると考えられる。

さらに、本論文で Freud, S. (1926/1970) は、「無力さという外傷的状况を、ただ成行きにまかせるのではなく、それを予見し期待するようになるのは、われわれの自己防衛にとって重要な進歩である。この予期のための条件をふくむ状況を危険の状況といい、この危険状況で不安の信号があたえられる」(p. 372) と述べ、不安を自我が危険を察知した際に発する不安信号として捉え直した。不安が先行し、それに応答して自我が防衛を動員するという構図である。この考えにより、危険を予期したことで、不安が生じ、防衛が作動する。結果として、防衛は心的装置の予防的・調整的機能としての性格を持つことが示されたと考えられる。

以上を総合すると、Freud, S. の防衛理論は次のようにまとめられる。

- ①防衛とは、葛藤状況において意識化しがたい観念・情動を処理する無意識的メカニズムである。
- ②防衛は、観念そのものを消去するのではなく、観念と情動との結びつきを変形させることによって不安を回避しようとする過程である。その結果として神経症症状や精神病的状態が生じうる。
- ③抑圧は防衛機制の中核をなすが、それ自体が唯一の防衛ではなく、他の防衛の成立を支える基盤的過程として理解されている。
- ④防衛は葛藤を解消するのではなく、葛藤を歪曲された形で存続させる操作であり、防衛が成功するがゆえに症状が形成される。ヒステリーと置き換えや抑圧、強迫神経症と反動形成、分離、取消しというように、症状形成と密接な関係がある防衛が存在する。
- ⑤1926年以降、不安は危険を予期した際に発せられる「信号」として位置づけられた。防衛は心的装置の予防的・調整的機能を担うものとして理解されるようになった。

III. Freud, A. による防衛機制の体系化

Freud, A. による 1936 年の『自我と防衛』では、およそ以下のような防衛機制を体系化している。退行、抑圧、反動形成、隔離、打消し（やり直し）、投影、取り入れ、リビドーの自分自身への向き変え、否認、同一視、知性化、転倒、昇華あるいは置き換えである。Freud, A. が整理した防衛機制の種類を見るとわかるように、適応的な自我活動としての防衛という視点を導入していることが、最大の特徴である。

Freud, S. が防衛（Abwehr）という概念を導入した当初、それは主として抑圧を中心とした無意識的過程として理解され、神経症症状の病因論と強く結びつけられていた。これに対して Freud, A. は、防衛機制を「自我の働き」という観点から再定義し、防衛が発動される条件、防衛の対象、防衛の様式を検討した。また、Freud, A. は、抑圧、合理化、反動形成、退行、隔離、置き換えなどに加え、現実の不快や現実の危険を避ける例として、幼児期の空想における現実否認や日常生活において見られる言葉や行為における現実否認について論じている。さらに、超自我形成における攻撃者への同一視を取り上げ、「健全な超自我が形成されるまでに経過しなければならない葛藤（Freud, A. 1936/1958）」（p. 152）を問題にした。ここでは、同一視が発達的に防衛機制といかなる関係をもっているかを明らかにしようと試み、児童心理学で扱われる反抗期の問題と結びつけて考えることを提案している。加えて、超自我形成過程において、激しい葛藤なしに表面的には道徳的な愛他主義が形成される過程についても取り上げ、強い葛藤を持つ攻撃者への同一視と同じように、同一視や投影の防衛機制が組み合わせられて用いられても、心理的結果は全く違ったものになることを指摘している。そして、思春期を例として、強い衝動にもとづく不安の防衛として、禁欲と知性化について検討した。

このように、Freud, A. は発達段階と防衛機制の形成について考察し、「退行、転倒、リビドーの自分自身への向きかえのような防衛は、おそらく、心的構造の発達の差異にかわりなく、衝動そのものと同様に古いものであろう（Freud, A. 1936/1958）」（p. 65）と述べ、早期に形成にされると推論している。それに対し、「抑圧や昇華という防衛機構が使用されるのは、比較的発達過程の後期であると考えられる。他方、投映やとり入れがおきると思われる時期は、それぞれの理論的立場によってことなるであろう（Freud, A. 1936/1958）」（p. 65）としている。取り入れと投影については、馬場（2002）によると、「これらを最早期のものとするクライン学派との相違を示している」（p. 442）。

さらに本書の理論的意義として、特定の防衛機制と特定の症状が原因結果の関係にあるという、病理の指標としてのみ防衛機制を取り扱わなかった点が挙げられる。Freud, A. は、防衛機制を自我の発達や適応過程と密接に関連する働きとして捉え、抑圧、否認、投影、同一視など、日常的にも観察されうる多様な防衛の様式を整理・理論化した。防衛機制のあり方が問題となるのは、その硬直性、過剰性、発達段階との不適合が生じた場合であると考えている。このような視点は、防衛機制が適切に用いられれば、適応にも繋がるものであることを示唆していると考えられる。

Freud, A. は、「自我が次のような三種類の不安にさらされるとき、防衛がおきる。すな

わち、衝動の不安、現実の不安、良心の不安にさらされるとき自我は防衛する (Freud, A., 1936/1958) (p. 86) と指摘しており、防衛機制を自我による不安処理の様式として再構成した。総じて、『自我と防衛』における Freud, A. の理論は、精神分析理論を病理中心モデルから発達・適応モデルへと拡張した点に本質的な意義があると考えられる。馬場 (2008) は、Freud, A. 以降、「防衛は必ずしも病気を作り出すというわけではなくて、メカニズムが役に立つ、社会性がある、自分を生かす働きにもなるのだという観点が出てき始めた」(p. 50) と述べ、「防衛・適応機制というべき」(p. 34) と指摘している。

以上より、Freud, A. の防衛理論は次のようにまとめられる。

- ①抑圧を中心とする病理的過程としてではなく、自我の能動的働きとして再定義され、Freud, S. にはない新たな防衛機制を提案した。その中には適応的な自我活動としての防衛という視点が導入されている。
- ②防衛機制は、発達段階に関連して形成されるものであり、防衛の種類によって、その成立時期が異なることを推論している。
- ③防衛機制理論を病理中心モデルから発達モデルへと拡張する理論に整理している。

IV. TAT 解釈の視点としての防衛機制

馬場 (2008) は Freud, A. (1936/1958) が取り上げた防衛機制の他に、Freud, A. とは共通しない概念として、強迫防衛、合理化、投影性同一視を挙げ、全部で 14 の防衛機制理論について叙述している。馬場 (2008) の各防衛機制の概念説明は、詳細かつ具体的であることから、TAT ストーリーにおける防衛機制の具体的な現れ方を検討する上で重要な示唆を与えてくれると考えられる。本研究では、馬場 (2008) を参考にしながら、Freud, A. と馬場に共通している防衛機制の中から抑圧、退行、反動形成、隔離、打消し (やり直し)、投影、否認、同一視 (同一化)、昇華を取り上げ、TAT を研究対象にする場合における防衛機制の定義づけについて検討する。

なお、Freud, S. が最初に発見したメカニズムであり、Freud, A. も取り上げている抑圧については、以下の理由から TAT で「このフレーズが抑圧である」という形では見つけられないものであり、本研究の定義づけから除外する。Freud, S の 1915 年の『抑圧』において示されているように、抑圧されたものが具体的な形になったものが、「退行」であり、「反動形成」であり、「投影」や「昇華」である。「抑圧された」という状況が基本的な母体 (エネルギー) としてあり、そのエネルギーが「反動形成」、「投影」、「打消し (やり直し)」、「昇華」などの防衛機制として表現されるため、「抑圧」を TAT で同定することは、かなりの困難を伴う。したがって、本研究で取り上げる防衛機制は、①退行、②反動形成、③隔離、④打消し (やり直し)、⑤投影、⑥否認、⑦同一視 (同一化)、⑧昇華である。

①退行 (regression)

馬場 (2008) は退行について、以下の 2 つを取り上げている。(i) 赤ちゃん返りのように発達の前の段階に戻る。(ii) 思春期の防衛としての退行。性的に発達する自

身の身体に恐怖感や拒否感、罪悪感がある場合、その発達を自分で受け入れることができず、以前の肛門期に戻ってしまうこと。その結果、性に関する事柄は、不潔な汚いものというように感じられるようになってくる。

小此木・馬場（1972）では、口愛期的退行、肛門期的退行に該当する。退行の前提には現実否認があり、その上で次のような特徴が指摘されている。口愛期的退行の現われは、（i）口愛期に関連する主題が見られる。（ii）検査態度に、検査者への甘え、依存が見られる。肛門期的退行の現われの特徴は、（i）肛門期に関する主題が見られる。（ii）図版の部分の捉え方に几帳面さ、完全壁、あるいはその捉え方、見方の不全感をめぐる葛藤がみられる。（iii）検査態度に頑固さ、堅苦しさ、過度の忠実さが見られる。

TAT 上での可能性のある現れ方として、被検査者の年齢を考慮した上で、図版上の成人の登場人物が子どもっぽい、幼児的行動をとる、論理的でない未熟な問題解決のあり方、sexual card とされる図版 4, 10, 13MF などでの性的なものを不潔なものともみなす、といったストーリーが考えられる。

②反動形成（reaction formation）

馬場（2008）は反動形成について、次のように説明している。本当にやりたいことの逆のことをするというメカニズムであり、トイレット・トレーニングの時期に、しつけをしつかり取り入れるところから始まると考えられている。これまではいつでもどこでも排泄ができたのに、トイレット・トレーニングが始まることで、決められた方法で、決められた場所での排泄行動が求められることになる。「ある種の子どもは、突然そういう時期にものがすごくきれい好きになるんです。そして、“私は、とても清潔にして、体がきれいで、いつでもパンツが汚れていなくて臭くないのが大好きなの” というふうに、自分で糞に積極的に乗ってしまう。“私はだらしのないのは嫌い。汚いのは嫌い。いつもきれいにしておきたい” というふうに逆の願望のほうを強めてしまうのです。そうしたほうが糞に乗りやすいし、親には褒められるよい子でいられます」（p. 76）。この例のように、ただ抑圧するだけではなく、逆を強めることで、効果的に抑え込んでしまうあり方が反動形成であり、敵意・攻撃性の反動形成や依存性の反動形成についても言及している。

TAT 上での可能性のある現れ方として、極端に道徳的、倫理的な態度、「本当に」「絶対に」等の過剰な強調、表面的な態度と深層の感情が一致しておらず矛盾する感情が示唆されるストーリーが考えられる。

③隔離（isolation）

馬場（2008）は、普通は観念と感情は結びついているが、両者を分けてしまい、観念だけが意識に上ってくるようにし、観念にくっついていないはずの感情を切り離して押し込めて、自覚しないようにしておくやり方と定義している。また、切り離すという隔離の防衛について、以下のように様々な使われ方があることを指摘している。（i）感情閉鎖的、過剰に論理的で、自然に自分の感情を話して良い場面でさえも、個人感情を出さない。（ii）公私の区別をしすぎてしまい、堅苦しく、個人を出さなすぎるため、親しめない人になっ

てしまう。

TAT 上での可能性のある現れ方として、感情的に重要な出来事を感情抜きで語る、図版に描かれた絵柄のみを叙述するなど事実のみを語る、感情的温かみのない事務的・機械的な語り口、詳細な描写に対し感情は語らないなどの検査態度やストーリーが考えられる。

④打消し（やり直し）(undoing)

反動形成の不全型、出来損ないと考えてよく、もとの欲動がそのまま出てきてしまったものを、その次に打消しをするものであり、役に立たない適応的でない防衛である。具体例として、(i) 強迫行為に見られるように、汚いものに触ったと思ったら、それを打ち消すために手を何十回も洗う。(ii) 何か嫌なものに触ったら、母親に“触らなかった”と何度も言わせる。自分の健全な自我では足りないため、より強い人の力を借りて打消し（やり直し）をやるといった説明がなされている（馬場，2008）。

TAT 上での可能性のある現れ方として、悪い行動の後に良い行動で埋め合わせる、「やっぱり〜でなかった」というように撤回や修正がなされる、強い力を持った魔術的思考の人物が登場するといったストーリーが考えられる。

⑤投影 (projection)

体の中の不愉快な邪魔なもの、いらぬものを、吐き出す、排出するということから出発している。自分の中にあるということを認めるわけにはいかない欲動や感情を外に出してしまい、自分にあるのではなく、外の他者にあると考える防衛であると定義されている。その結果、他の人から自分に向かってくるというように感じられることになり、自分はある人に対して敵意など持っていないが、どうもあの人が私に敵意を持っているらしい、と感じることになる。自分が思っていることを、自分が思っていると感じるのではなく、他者が思っているのだ、というように考えるのは、みな投影であると説明されており、発展していくと被害念慮や被愛念慮になる（馬場，2008）。

馬場は「自分は思っていないのに」(p. 85) という前提がつくのが特徴であると、強調している。また、このメカニズムは日常生活レベルから、神経症レベル、さらに重篤なレベルでも見られる防衛規制であると考えられている。

TAT 上での可能性のある現れ方として、語り手自身の怒りなどの感情を登場人物に外在化させる、物語の登場人物を繰り返し敵対的に描く、状況的根拠なく他者を脅威として描くなどのストーリーが考えられる。

⑥否認 (denial)

馬場（2008）は、この防衛機制について、否認のメカニズムを使い、抑圧をしているという構造であり、自分の周囲で起こっていることに見ないふりをしているのではなく、本当に気がつかないと定義している。否認の例として、(i) 街角を歩いていて、不穏な雰囲気や喧嘩している人に気づく人と気づかない人の違い、(ii) 話をしている、あること

に関する話の部分になると、まったく覚えていない人を挙げている。また Freud, A. (1936/1958) は、この否認について、幼児においては健康なメカニズムとして紹介している。

TAT 上での可能性のある現れ方として、図版刺激内容と明らかに異なる内容が語られ、現実が歪曲される、図版刺激から明らかに存在すると考えられる葛藤や問題が語られないなどのストーリーが考えられる。

⑦同一視（同一化）(identification)

馬場（2008）は、自分の個があった上で、取捨選択しながら自分がいいと思うものを取り入れていき、いいと思わないものは取り入れないというようなことができるのが、同一視（同一化）だと定義し、より成熟したハイレベルな防衛として位置づけている。幼児は、養育者の価値観や評価に適応するよい子として親を同一視するが、成長とともに様々な親とは違う考え方や行動を示す人を同一視し、親の雛型ではない自分を作っていくことができると指摘している。

TAT 上での可能性のある現れ方として、他者への賞賛と模倣が描写される、他者の強さや能力を自分のものとして語る、他者の成功を自己の達成と同一視し目標を共有するなどのストーリーが考えられる。

⑧昇華（sublimation）

小此木（1987）は昇華について、成功した防衛であり、社会化された形での欲求の満足を得ることのできる防衛であると定義している。それは、欲動を直接的でない対象への置き換えによって社会的に受け入れられるような形で満たす心的な機能であり、一種の「置き換え」と考えられる。

馬場（2008）は、「防衛が成功していて、社会性がある、自分の欲求を満たすと同時に、その満たし方が社会的な規範やルールに合致している、そして社会的な価値のある方向性をめざして、それを達成することに願望が置き換えられる」（p. 89-90）と説明している。また、健康な自我活動となるための条件として、以下3つの条件を挙げている。（i）性欲や攻撃性などの欲動が全部防衛されているのではなく、TPO を踏まえてある程度、直接的に欲求の充足や開放ができていること。（ii）自我が強くなければならないが、強いということは自我の柔軟性があるということ。（iii）社会のある目標に向かってエネルギーを使っていこうとするように、自律的な自我がよく発達していること。

TAT 上での可能性のある現れ方として、衝動が別の創造的形に変換される、結果が社会的に価値があるものとして建設的結末として描かれる、内的な葛藤が創造的に解決され、登場人物が達成感を得るといったストーリーが考えられる。

V. 今後の課題と展望

今後の課題として第一に、本研究で整理した防衛機制が、実際の TAT ストーリーの中

でどのように現れるのかを、具体的な TAT データを用いて検討していく必要がある。物語の「内容」だけでなく、感情や葛藤から距離を取る語り口や検査者への態度など、物語の「語られ方」にも注目し、どのような特徴を根拠として防衛機制と判断するのかを明確にしていく必要がある。Cramer, P. (2017) は TAT の各図版によって、特定の防衛機制を引き出しやすい傾向があると、card pull の影響を論じており、使用する図版の違いによって引き出されやすい防衛機制が変わる可能性が考えられる。また、被検査者の年齢や病理によって用いられやすい防衛機制が異なる点も踏まえる必要がある。第二として、どの図版でどのような防衛機制が捉えやすいかを整理することが課題となる。

今後、これらの課題に取り組むことを通して、TAT に現れる防衛機制を手がかりとした人間理解を深め、心理的適応過程をさらに理解していきたい。

文献

- 馬場禮子 (2002). 防衛機制. 小此木啓吾 (編集代表). 精神分析事典. 岩崎学術出版, p. 442.
- 馬場禮子 (2008). 改訂 精神分析の人格理論の基礎. 岩崎学術出版社.
- Breuer, J. & Freud, S. (1893). Über den psychischen Mechanismus hysterischer Phänomene. Vorläufige Mitteilung. 懸田克躬・小此木啓吾 (訳) (1974) ヒステリー現象の心的機制について, フロイト著作集 7. ヒステリー研究. 人文書院, pp. 9-22.
- Cooper, S. H., Perry, J. C., & Arnou, D. (1988). An Empirical Approach to the Study of Defense Mechanisms: I. Reliability and Preliminary Validity of the Rorschach Defense Scales. *Journal of Personality Assessment*, 52(2), 187-203.
- Cramer, P. (1987). The Development of Defense Mechanism. *Journal of Personality*, 55(4), 597-614.
- Cramer, P. (1991). The Development of Defense Mechanism. Theory, Research, and Assessment. Springer-Verlag.
- Cramer, P. (2015). Defense Mechanism: 40 Years of Empirical Research. *Journal of Personality Assessment*, 97(2), 114-122.
- Cramer, P. (2007). Longitudinal study of defense mechanisms: late childhood to late adolescence. *Journal of Personality* 75, 1-23.
- Cramer, P. (2017). Defense Mechanism Card Pull in TAT Stories. *Journal of Personality Assessment*, 99(1), 15-24.
- Freud, A. (1936) Das Ich und die Abwehrmechanismen. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. 外林大作 (1958) (訳). 自我と防衛. 誠信書房.
- Freud, S. (1894). Die Abwehr-Neuropsychozen: Versuch einer psychologischen Theorie der akquirierten Hysterie, vieler Phobien und Zwangsvorstellungen und gewisser halluzinatorischer Psychozen. 井村恒郎 (1970) (訳). 防衛—神経精神病—獲得性ヒステリー, 多くの恐怖症と強迫観念およびある種の幻覚性精神病についての心理学的理論の試み. 井村恒郎・小此木啓吾他 (訳). フロイト著作集 6. 自我論・不安本能論. 人文書院, pp. 7-17.
- Freud, S. (1915). Die Verdrängung. 井村恒郎 (1970) (訳). 抑圧. 井村恒郎・小此木啓吾他 (訳). フロイト著作集 6. 自我論・不安本能論. 人文書院, pp. 78-86.
- Freud, S. (1926). Hemmung, Symptom und Angst. 井村恒郎 (1970) (訳). 制止, 症状, 不安. 井村恒郎・小此木啓吾他 (訳). フロイト著作集 6. 自我論・不安本能論. 人文書院, pp. 320-376.
- Homann, E. (2018). The Rorschach Omnipotence Scale and closed-system processing. *Psychoanalytic Psychology*, 35, (4), 454-461.
- Lerner, P. M. (1990). Rorschach assessment of primitive defenses: a review. *Journal of Personality Assessment*, 54(1), 30-46.
- Lerner, P. M. (1996). Current perspectives on psychoanalytic Rorschach assessment. *Journal of Personality*

Assessment, 67(3), 450-461.

小此木啓吾 (1970). 解題およびメタサイコロジー解説. 井村恒郎・小此木啓吾他 (訳). フロイト著作集 6.

自我論・不安本能論. 人文書院, pp. 415-458.

小此木啓吾・馬場禮子 (1972). 精神力動論, 医学書院.

小此木啓吾 (1987). フロイトの精神病理学その四. 小此木啓吾・岩崎徹也・橋本雅雄・皆川邦直 (編).

精神分析セミナーIV. フロイトの精神病理学理論. 岩崎学術出版社, pp. 135-170.

Schafer, R. (1954) Psychoanalytic interpretation in Rorschach testing. Grune & Stratton.

Schafer, R. (1967) Projective Testing and Psychoanalysis. selected papers, International Universities Press, Inc.

安岡誉 (2002). 防衛. 小此木啓吾 (編集代表). 精神分析事典. 岩崎学術出版, p. 441.